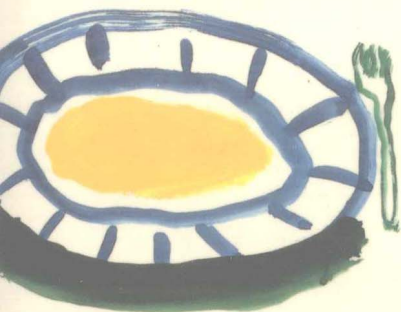


食べるぞ
食べるぞ
今江祥智



食べるぞ
食べるぞ
今江祥智



マシナハウス

食べるぞ食べるぞ

一九九三年五月二〇日 第一刷発行

著者——今江祥智

発行者——吉森規子

発行所——株式会社マガジンハウス

東京都中央区銀座3-13-10

電話 書籍販売部

〇三(三三五四五)七二三〇
書籍編集部 〇三(三三五四五)七〇三〇

印刷所——三松堂印刷

製本所——積信堂

装画——長新太

装幀——杉浦範茂

©1993 Yoshitomo Imae Printed in Japan

ISBN4-8387-0446-1 C0093

乱丁本・落丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
定価はカバーと帯に表示してあります。

食べるぞ食べるぞ 目次

第1章	おせち	7
第2章	ぶりの粕汁	14
第3章	ブレーン・オムレツ	22
第4章	素巻き	36
第5章	チョコレート	44
第6章	おつけもん	52
第7章	夢食い	59
第8章	和洋折衷	80
第9章	朝の店で	89

第10章 仏蘭西料理フルコース 109

第11章 ゆっくり美味しく飲む 130

第12章 幕間 144

第13章 正夢 151

第14章 大味小味 159

第15章 かわりめ 165

最終章 鼠六匹 172

あとがき 179

食べるぞ食べるぞ

おせち

四十五歳になる今まで、始^{はじめ}は年末のおけら詣りを欠かしたことがない。八坂神社^{さん}で吉兆縄の先に火を移し、消えないようにくるりくるりとまわしながら家までもち帰る。京では毎年の、年の終わりの小儀式である。

その火でもって竈^{かまど}の火をおこす。幼い頃に、つけさせてもらった記憶がかすかにある。けれど肝心の竈を使わなくなって久しいから、縄の火が本来の役にたたなくなっても久しいのだが、始は必ず出かけ、必ずもち帰るのだった。それなしには年は終わらず、新年も始まらないような気がするのである。

しんと冷えた冬の京の夜半の街を、沢山^{ざようさん}沢山の人々が、手にした縄をくるくるまわす

その火の輪の美しさに、初めて見たときから惹きつけられていた。子ども心にも、どこかふしぎで妖しくて、何ともきれいな火の輪に見えた。

そして一昨年から、そのきれいな火の輪の中に、景子の顔がぼっともるようになった。景子と初めて出会ったのが、そもそもおけら詣りの最中だったのである。

ふとしたことから独り者にもんまいもどった年から、始はおけら詣りを、祇園で馴じみの小料理屋の「おこう」から始めるようになった。そこで小鉢ものを二、三品とり、お氣に入りの「今代司」を徳利で二本ばかりゆっくりやってから八坂神社にむかうのである。

始は、背丈が一八七センチで九〇キロに近い体だから、けっこう見栄えがする。それが、上物の大島紬つむぎなど着てゆったり歩くと、やはり目立つ。少なくともお詣りの群れからは、一頭地を抜くかっこうになる。そのかわり、足許が心許なくなる。小さな子どもなんかと、躓くつまずようなぐあいについていぶつかってしまうのだ。

そのときも、あ、やってしまったと思った。誰かにつんといき当たったのだった。

ー いたいわ。いたいじゃない。

下から湧きあがってくるようなその声は、小学生の男の子に思えた。

―乱暴じゃない、おじさん……。

その声はそう続けたから、始は声の主のことをてっきり小学生だときめてしまった。それでも、そんなときいつもやるように、

―や、ごめん、かんにん。かんにんやで、坊……。

と、まずあやまった。

―ま。ぼん……ですって。

その声は半オクターブ高くなり、それで声の主が女性だと知れた。

始は正式にあやまるべく立ち止まった。相手も立ち止まった。見下ろすと――といえば少々大袈裟になるが、相手はそれほど小柄だった。始が小学生だとまちがえたのも無理はなかった。

ふたりだけが、神社に急ぐ人の群れから取り残されたように向き合った。といっても、始が見下ろしていたことにかわりはない。街灯のあかりで、相手の白い顔がまず目に入った。始には最初その顔が、花梨かりんの花に見えた。家の裏庭に七、八十年ものの

花梨の木があり、晩春に薄桃色の小さなきれいな花をつける。レモン色の大きな果実をつけ、その強くて甘い芳香も、始は氣にいつていた。

白い顔は、その花を思わせ、同時にうっすらと香りを放つように思えた。

むろん、それは花梨からくる錯覚で、相手が何か強い香水でもつけていたわけではなかった。「花」に目が馴れたところで少しづつ見ていくと、相手は、柔らかく暖かそうなマフラーつきのハーフコートを着こみ、その色がうすいモスグリーンだったから、兎に見えた。草原を機嫌よく散歩していたのが、不意に縞馬の脚にぶつかって、きょとんとなった小兎のように見えた。

——こらまた鈍^どなこととしてしまいました。かにんどっせ。

始も今度は正式に詫びたつもりで、丁重に言った——つもりだったが、相手にはどうやら通じなかったらしい。目をまん丸に見開いて、始のことを見上げて、口の中で呟いた。

——何かしらないけど、ふにゃふにゃしたことを口走って、もう……。

——あ、いや。東京のお方ですか？

始は京言葉をやめて、馴れない標準語で訊き返した。

—そう。もう少しではねとばされるところでしたのよ。

小兎は、やっとこれだけ言ってやったぞ——の表情になった。

—はねとばすは大仰やろと思えますけどなあ……。ほんま。

始はまたふにやふにや言葉にもどった。

—ま。反省するところ少し、ですのね。

相手は切り口上になった。その、ちょっと怒ったような顔つきを、始は可愛らし
……と思ってしまった。

—こんなとこで立ち話も何どす。ちょっとお付き合いいただけまへんやろか。

「おこう」へもどる気になっていた。あそこで温いものでもつまんでもろて、もいっ
ぺん出直すというか、気分を直してもろて八坂神社へ行き直すつもりになっていた。

—付き合うって、どこへ？

相手は好奇心で一杯の声を隠しもせずに訊き返した。

—祇園の馴じみの小さなお店です。

—ギオン？　ですって……。

相手は外国語みたいに発音した。

—付き合うわ。

そして、引き返した始について、速足で歩きだした。始はふつうに歩くのだが、ふたりのコンバスのちがいがいから、しぜんとそうなってくるのである。

—またお早いお帰りどしたなあ。

「おこう」のおかみは、始の姿を見ると、それだけを笑いながら言った。始の後から小兎が姿を現しても何も言わなかった。しぐさで、どうぞお入りやす——になった。

気がつくとその女性は、この店の常連みたいに落ち着いて、つくりたてのおせち料理のお毒見役をしていた。いりこんにゃく、たたきごぼう、やつがしらの含め煮、ふっくらたいた黒豆……と食べていって、栗きんとんところで箸が止まってしまった。

可愛らしい目がおかわりを頼んでいて、おかみは面白がって盛り直し盛りたししていった。小兎は、それをそれこそ兎みたいに素早く平らげていった。

（甘いもんをそないに食べはったら……）

ふとりますがなと言いかけた口を押さえた始は、その女性の実にほっそりした体を眺めやった。感心するくらいに華奢きしゃに出来ているのである。ふとらない体質らしかった。小鉢ものの二、三品で満腹してしまふ始とは、どうやら正反對らしかった。

それが一昨年の暮れのことであつた。

ぶりの粕汁

ふたりは改めておけら詣りに出かけた。和氣藹々^{あいあい}といった雰囲気で「おこう」を出られたのは、栗きんとんのお蔭や——と、始は思った。景子が大満足の顔で店を出たのをちらと見て、そう思ったのである。景子の方は、ほんとはもう少し食べたかったのだが、初対面の男性の前で、しかも初めて連れてこられたギオンの店で、あれ以上のおねだりは出来なかった。好きなものには目のない景子でも、それくらいの慎みは持ち合わせていた。

（もう一口だけ……）

という言葉を喉元から押し戻し、最上の笑顔をつくって始について店を出たのだっ